



(號九十八百二第)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年三月十五日發行(毎月一四十五日發行)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
東京市小石川區白山前町 統一編輯所

大僧正 本多日生師撰述

覽天賜

大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序
文學博士 姉崎正治先生論文

全部 十八卷 菊版洋裝上製
每冊四百頁以上
改正定價各冊
金貳圓四拾錢
送料各十二錢
既刊 自一卷至十卷

東京博文館
本町

第十卷一新刊

本書は大藏經中重要なる經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の真理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要に迫れるの時の大著に接す。心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべきなり。(大正六年)

既刊目次 昨午七、八月本誌廣告に掲ぐ

日蓮主義綱要

本多大僧正著
正價壹圓六拾錢
送料八錢

日蓮聖人正傳

本多大僧正著
定價壹圓六拾錢
送料八錢

高山樗牛と日蓮上人

姉崎文學博士編
正價壹圓五拾錢
送料八錢

淫祠と邪神

和田文學士著
正價壹圓
送料八錢

時事短評

一記者

健全思想と日蓮主義(續)

大僧正 本多日生

一王一佛主義の顯現

權大僧正 野口日主

日蓮聖人教義綱要(續)

僧正 井村日成

機微譚語

山根青村

千葉縣の宗風を奈何

大橋日製

日本國體と民本主義

文學博士 三上參次

誤れる佛教國

馬和尙 矢野聖顯

二行報道

一記者

和歌課題「雨後若草」

子爵 清岡長言選

統一俳欄 各地報道

尺五絹本雪景山水



(在米國 開爲太郎氏藏) 王 山 筆

尺五絹本水墨山水



王 山 筆

時事短評

■世界の進歩は文明の基礎に立ちて發達するもの也過去人文の歴史を無視し而して改造を叫ぶ者の結果は畢竟改惡に終る

■朝鮮にては民族自決の名に於て一部民騷擾せり而も其實は某國基督教宣教師が背後にあつて煽動せること明なりと傳ふ

■由來白哲人が他國侵略は最初は多くは基督教徒の紛擾に因るもの也博愛平等の美名の下に野心を遂んとす其の行爲可惡

■基督の外に天道教あり天道に背いてセンドウす宗教の惡質なり於是て朝鮮人を眞に導く良宗教を憶ふ文部大臣の請一考

■民族自決にも一理ありとするも朝鮮到底自立の力なし日鮮提携は則ち鮮人の幸

福なり騷擾悲む可しと鮮人尹致昊長嘆す

■姉崎博士渡佛東洋宗教の爲に欲吐氣煽曰く東洋宗教の天然の感情例へば神社の森が如何に崇嚴なる感念を誘致するか等

■感情觀は信仰の結果に述べ到らざれば結局其體を得ず博士の學者的態度は更に一步を進めて各宗義の比較評に入を要す

■日本教報とか云ふ日蓮主義の雜誌に須磨子の死を謳歌せる文ありと中外傳ふ這んな事を云ふ坊主は無益の雜談以上なり

■異部落の信仰は眞宗九分日宗一分なり其撤廢を云ふ既に遅し先づ寺院參詣者に同席せしめ同食せしむるより其實を擧よ

■眞宗の派屬伯男の爵位を得て得々然たり其宗義の根底は反國家的にして其俗體は街臭たり頃日華族返上勸告者出むべ也

■某宗に於ては住職の資格を普通學は尋常小學卒業に止めんとすと云ふ何れにしても引導と經讀みの機械に過ぎざるのみ

■兵隊と農夫や労働者やが過激派にかぶれて國を覆し今又水兵と職工が組んで反過激派運動を爲す露國人の遺る事不可解

■各宗が上地境内の拂下を運動す此の拂下は偶々死灰的宗旨の餘命を永からしむ國有は國家の益、死宗有は俗僧の懐肥耳

■布教傳道は轉法輪なり信者此に集る信者は則ち食輪の轉者也、傳道は面目也文相の僧侶眞面目ならずと呵す當然何怪

■信者を生まずして黄金や食糧を生むことに腐心する各宗坊君の様恰も餓鬼に似たり侮辱されたりとて立腹は修羅の形相

健全思想と日蓮主義

(未校閱文責) (續)

本多 日生

▲日蓮主義の大調和

日蓮主義は立正安國である。正法華經に依つて國家人生を救ふ教である。法華經の意義を解し、日蓮上人の事を考へれば愚鈍者は別として多少理解力ある者は一身を捧げて國家の爲め一切衆生の爲めに盡さねばならないのである。日蓮上人が龍の口に於て首切れ様とした場合にも上人は正法を以て國の爲め、一切衆生の爲に盡したのである。此正義の爲に所するの少しも苦痛と思はぬのみならず、是れ程の喜びは又と無いと仰せられてゐる。又佐渡が島に流されても上人は正義の爲めに此處に至つたのであると云はれて、如何なる迫害に遇ふとも此正義の主張は止める事は出来ぬ。之れ國の爲め人類の爲めに盡す所以であると云はれて居るのである。今日は日蓮主義を措

いて、世の害毒を除くものはない、日蓮主義は現代を救ふべき力ある教である。二宮先生 楠 正成等を持つて來ても最早や其效はない。日蓮主義は眞に生れ變るべき現代の要求に應ずる力を有つて居る所謂天地の公道に基き、三世を一貫せる天地の大道を必要とする現代は思想的大調和の實現を期せねばならぬ。徒らに部分的の小事に拘泥するのは今日の憂患である。教育とか宗教とか其一つ一つを云ふべきでない人間の身體には前も後もあり指もある。人間と云へば其全體を云ふのである。起きて居るとか寝て居るとかは人間としての問題でない。然るに今日は人間其物を忘れて、極めて小さな處で騒いでゐる。

▲氣魂なき現代の文學

文學を見ても解る、現代の文學は極めて小事を題材としてゐる。昔は包容的である一部の八犬傳を讀めば政治もあり、宗教もあり道徳もあり、何でも無いものはない。近頃の文學は如何かと云ふに電車の中に一人の女が乗つて居つた。東京人か田舎人か一寸見分けが付かない。東京人の様でもあり、田舎人見た様な處もある。品川終點に降りたが、大森の方に行くらしい。或は田舎人かも知れぬなど愚にもつかぬ事を云ふて居る。又或は「僕は下宿屋に友を訪ねて行つたら、或る座敷に通された何だか其邊に香水の香がする。ハテ何だらう男が居つたのか女が居るか、若くはハイカラでも居た處では無いかと思ふた。段々研究して見たらやはり女學生の居つた處と云ふことが判然した」など云ふ様なことを書いて、喜んで居る。極めて小さな何の意義と氣魂も無い此のやうな事では到底駄目だ。大調和主義の興起せざるべからざる所以である。地球は何万年経つと雖も、衝突はない。之れ大調和があるが爲めであらねばならぬ。此大調和の中に我等は生活して居るので

ある。獨立獨歩と云ふた處で兎角矛盾衝突が出来る。地球の如き大調和を得ねばならない。宗教の立場より見れば如何、政治の立場より見れば如何と云ふて居るが、立場と云ふ事は極めて小事である。立場より見れば、と以ふ事が衝突なのである。上は天道に則り、下は地の理に背かず、國民は國家の進運に、家庭は家運の隆盛に、團員としては團の發展に盡して衝突してはならぬ。一切が調和に依つて成立する。西洋の文明は自己の立場を主張したものである。故に害がある、大真理ではない。政治家が人民の自由を束縛するは真理ではない。資本家が労働者を壓迫するも真理でない。宇宙は大調和である我等は其中に生存してゐる、人道主義も博愛主義も尙皆小事である。更に一步を進めて大調和統一主義に合せねばならぬ。親は意見もすれば愛しもある。只意見計り云ふて居れば子供は聞くものではない。となる之れは何れが悪いか解らん前なるものは導き後の人は之れに随ふ。此に平和があり進歩もある。然るに導かず随はずとすれば、家庭も國家も社

會も調和は破られて了ふ。此場合に日蓮主義は大調和の本家本元である。

▲東洋は調和西洋は分列主義

世界を通じて云へば、東洋は調和主義であり、西洋は分列主義である。哲學思想より云ふも西洋は分列である。政治より云ふも西洋は革命である。經濟も亦然り、東洋は全く之れと反對である。日本には建國と共に、一貫せる大道がある。今日より考へても少しも改造する必要はない。儒教にも立派な精神がある。儒教では「述べて作らず」と云ふて學者が出て、根本思想を離れる事はない。佛敎も然りて、如何に偉い人が出て釋迦牟尼佛の教に附隨するのである。傳敎大師も弘法も達摩も釋尊には平伏する。佛敎に別教と云ふ言葉があるが、西洋は所謂佛敎にて云ふ別教である。一民法を作るにも何千ヶ條の細目がある。日本では親が家を治めると云ふ事に定まつて居る。別教には「塵沙の惑を斷す」と云ふて、沙の數程の煩惱を斷たねばならぬ。圓教は「一

念法界に遍し」と云ふて釋迦牟尼佛が一度悟道を開けば、其一念に釋迦一佛の悟るのみに限らず、三世諸佛の覺悟を包含するのである。西洋人にはかかる事は解らないのである。又儒教には「開けば宇宙に遍ねく巻けば密に藏る、大徳は頓化し小徳は缺くる」等と云ふ。

此の如く一貫せる大道がある、個人主義など云ふべきでない。西洋は別教思想なる故に止むを得ないが、日本人にして別教思想に囚はる者は餘程の愚者と云はねばならぬ。又儒教は「君子は中庸に於てす」と云ふて居るが、中庸とは調和である。國家本意と云ふからとて、個人を認めぬのではない。西洋思想を壓するに於ては、中庸に於てすの一句で充分である。又佛敎より云へば、妙法の妙の一字で可い。開けば八萬四千の法となり、巻けば妙の一字に歸着する。東洋は何處迄も大調和主義である。大調和と云ふても親子兄弟一枚蒲團に入つて居ると云ふ事ではない。親は親、子は子、女房は女房の道が立つて、其處に調和があるのである。

▲宗教の力と眞の幸福

我が統一國は此調和を理想とする。而して世界を指導すべき大目的を以て立つて居る。阿彌陀も大日も基督も調和して居る。法華經は政治も教育も宗教も経済も一切を包含する。國家と經濟、資本家と労働者、道徳と宗教、教育と宗教等の調和を示すのである。此意味に於て日蓮主義は健全思想を興ふと云ふのである。又一つは宗教の必要である。必要と云ふても生温い事ではない。宗教が無ければ個人としても左様であるが、國家は滅亡である。宗教無くしては世界は地獄である。宗教の何たるも考へず生活難を騒いで居る輩は、足なくして歩いて居る幽霊の様なものである。子供は盜賊となり女房は出奔となる。到底無事には濟まないそれが目前の事である。社會も宗教が亡ぶれば致方がない資本家と労働者は忽ち衝突する。百姓は米を高くしようとし、政治家は安くせんとすれば、調和は出來ない。斯くては社會は闇黒あるのみ。國家も人類も然りである。宗教を捨てたる

人生は考へれば直ぐ解る。如何なる宗教にも尊い處がある。中にも東洋には佛教が人類と調和して居る。佛教中にも法華經は最も好い。何宗にても可い宗旨の定め方は何でもよい。今日は清き活きた宗教に入れれば可いのであるから清き力を得て満足なる生活を求むべきである。

▲宗教なき社會の悲惨

釋迦牟尼佛は一國の皇太子と生れたが自ら宮殿を出て、道を求められた。幸福は外界に求むべきではない。自働車で飛び回して遊んでも、幸福と云ふ譯には行かぬ。病人が痛い處を摩すつて、一時の痛を止める様のものである。財産ある者も破産すれば苦痛が起り、政治家が失脚して病人となり、美人が色香に誇つて居ても年と共に衰へて死なねばならぬ。社會の名譽財産等に依つて幸福を求めんとするは、恰もギャンマンを石の上に落すと同じ事である。政治には失敗するとも財産を失ふとも自己を維持すべき力を持たねばならぬ。摩すられて痛みを止める様の事でもなく自ら健康者とならねばならぬ

▲偉大なる妙法の力

然し末世に於ける我慾に固定した輩は致方がない。之を宗教は解き柔げねばならぬ。此我慾者を變化さすべき力を日蓮

「眞なる哉回や」顔回は孔子の第一の弟子である。身は極貧にして然も道を以て樂んで居つた。宗教には此事が立派に現はれて居る。假令子供に死なれても、我は宗教に依つて愉快を得たり、財産を失ふとも我に信仰ありと云ふ。宗教心なき時は人生は悲惨である。死にたくない死にたく無いと云ふに終に死んで了ふ。彼岩崎彌太郎氏は金は多くあり、何一つ不自由はなかつたが、最後の死の時に立つて餓饑を食ひ度いと云ふても食ふ事が出來ずに死んで了ふた。哀れである。若し信仰があれば、萬事成せりと永遠の成佛に向ふ事が出來得る。此の如き事は一遍で了解が出来るものである。宗教は永遠の生命を興へ絶へず導きとなるべきである。古來より法華の前は素通りは出來ぬと云ふ事に成つて居る。馬鹿哲學者は別として、普通の者なれば必ず感化される

▲光榮ある信仰の郷土

故に日經上人以後の分を新談議と云ふのである。此新談議を作ると云ふ事は言論の戰爭に従事する僧侶を養成するの意味である。此時代は千葉縣は共同一致であつた。新談議僧が出ると云へば、親族關係のあるものは勿論、何等關係なき他人でも我村より今年は新談議僧が出る」と云ふ事に成ると赤飯や色々のものを作つて、大祝ひをしたのである。此立派な信念に依つて起つたのが宮谷檀林である。千葉縣には此様な立派な歴史がある。此歴史あるにも拘らず、病人のある時に題目を唱ふるは忌事と云ふは何の事であらう。先づ先祖を起して聞くがよい。歴史は事實である。此事實を捨て、他より求め様とするから千葉縣は宗教が進歩しないのだ。教育家も大いに宗教を研究すべきである。千葉縣には右の如き歴史がある。特に七里法華同一信仰にして他の教無きは教育家としては非常に教育し易いのである。老人に成つて宗教信仰を始め

在大阪 山田秀太郎

此余曩日所贈于梶井恆雅君今以之

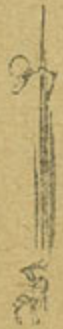
似鼓城松尾研兄併乞政

人也對佗無競争

安如寬厚有交情

秀吾多歲服君量

此思不禁聊致誠



るは已に遅い。勿論無きには勝るが、少年時代より其根柢を定めねばならぬ。此意に於て宗教家は勿論教育家其他政治家も實業家も一大調和の本元に努力せられん事を望むものである。——(終)——

主義は持つて居るのだ。今後の宗教は此力を持たぬものは駄目である。ボクボク無妙法蓮華經と高唱する力に依つて救はれる。日蓮主義は諸有惡徳の人間を矯正するの教である。諸君よ諸君は其夢より醒めて此御本尊に依つて救はれねばならぬ。(此時正面に安置せ)此御本尊は日經上人の御眞筆で、千葉縣の人は日經上人に依て救はれて居る。千葉縣と日蓮主義は極めて深き關係を持つて居る。一時日蓮主義者の教育事業は、千葉縣に依つて維持された。彼の有名な天文法亂の根元は上總の茂原の一信者に有つた。昔は儲かに偉い信者があつた。天文法亂は日蓮宗としては大迫害であつて、天文法亂の結果として法華宗の僧侶は千葉縣人が教育する事に成つたのである。先きに談議と云ふ事をやつたものだが、談議は織田信長と講話の結果に出來た極めて通俗的にして、法華經主義などは一言も説かない。只有がたい話をした者である。處が日經上人は其を憤慨して不平を鳴らした信長に願ふても許されぬ。それで直に

一王一佛主義の顯現

野口日主

大戦後世界の思想潮流を混沌其底止する所を知らず此の主義顯現を以て人類の幸慶なりと信じ故に記す

(一) 大戦後の興亡國

今回の大戦に依りて世界地圖の色どりも變るであらう。而し委しい事は平和會議の後で無ければ分らない。併し専門家の説に依ると、國體の變更すべきは左の國々であると云ふ。

ハンガリー共和国、獨逸人塊太利亞、南獨逸共和国、中獨逸共和国、エルベ共和国、普魯亞共和国、ライオンランド、ルクセンブルグ、リビテンスタイン、

また新たに興るべき國は
プハラ王國、ヒワチー國、カフガス、アルメニア、猶太、ウクライナ、リトワニア、芬蘭、波蘭、ホベンヤ、南スラブ聯邦、

等なりと
新興國は誠に喜ぶべきことではあるが、吾人日蓮主義より觀れば果して立正安國の意義に叶ふか否か立正安國の意義に契はぬ國柄とすれば、

其の國永く幸慶を得るや否や問題である。

(二) 宗教界思想界

西洋基督は物質文明に壓迫せられて、既に孤城落日の姿であつた所へ今回の大戦争でいよいよ其の力の無ひと云ふ事を暴露した。今はニイチェの超人哲學も、トルストイの人道主義も、ベルグソンの直觀主義も、オイケンの新理想も泡の如く消へ失せて(日本にても然り)今はデモクラシー全盛の時である。之はいろ／＼翻譯して居るが民主主義と譯するが最も適當して居るのである。然れども民主は君主に反對の意義餘り明かにて日本には遠慮して、民主と決して用ひて居るのであらう。始めは猫を冠りていざと云ふ時には居居り強盜的になりはせぬかと心配するのである。併し民主主義も開て見ると善き事は澤山ある。民主主義、民主主義、民主主義、國際的民主主義、平和的民主主義、道徳的民主主義、人格的民主主義、人道的民主主義、是等は何れも結構である。併し我國では民主は許さない民本も陛下より云ふことで民より云ふべきではないと思ふ。例令西洋流の民本説善し

(三) 四恩説と民本主義

西洋の説は何でも善いやうに思ふ人もあるけれども東洋にも、是れに勝る説があれば用ねばならぬ。衣裡寶珠を知らず徒らに他を憚れる態度は止めねばならぬ。デモクラシー所謂民衆説は佛教で云へば、四恩の一つである。四恩とは(一)衆生恩(民衆恩)、(二)父母恩(家庭)、(三)國王恩(國家)、(四)三寶恩(天地)であつて、佛教は民衆の權利人格を認める以上の民衆の恩を説くのである。其上に家庭、國家、天地の恩を説いて、阿彌陀の道義を教めるのである。況んや大乘法華經に至つては、盡十方通一佛出と説き、

其中に互礙荆棘なく、一切三千の衆生妙法五字に照されて、本有の尊形となると説いてある。民衆を輕んずる所か民衆即佛尊形なりと云ふのである。併しながら民主ではない。妙法五字に照されて云々、妙法五字は本佛所證の妙法なれば、本佛功德の妙法に照されて、衆生即佛尊形を顯すのである。之れ本地の風光にして、日本國に事現し、世界に光被せんと絶叫せしは、實に日蓮聖人である。

(四) 一王一佛主義

涅槃經曰一國中二轉輪王一世界中二佛出世無レ有此處

大論曰名三千大世界二爲二佛世界一是中更無二餘佛實一釋迦牟尼佛也
記一曰世無二佛國無二主一佛境界無二二尊號一

拘地論曰世無二佛國無二主一これ釋尊の説にして、日蓮聖人の主張である。今や世界各國小主権者分裂の故に、戰爭愈よ激烈を極める。斯くの如きは決して天の道にあらず地の幸福でもない。本來清淨本來尊嚴如日如月の王統を求め、慈悲慈雨人類を潤すの絶待天皇に依止して、世界平和人類幸慶を企圖するの、今後永遠の急務であると信するものである。佛教の所謂轉輪一聖王家である此皇威が輝かなければ、世界の亂争暗黒は止まないであらう。併し此一王とは單一王ではなくて統一

王でなければならぬ。一王にして一切王でなければならぬ。一切王に統一せられて、始めて眞の一王主義となるのである。吾人は此主義顯現を以て、世界の平和人類の幸慶と信するものである。一佛主義とは何ぞや、所謂統一佛である。思想界王である。出世間王である。今や思想混濁、其適歸する所を知らない。世界に三千餘の宗教ありと云ふ。其綱を以て任じた基督教は今既に光を失つた。漢きより漢きに入る衆生を如何に導くべきか。如何に照さすべきか。唯久遠實成實修實證三世盡十方化他赴物三千統一圓具の大釋迦本佛あるのみである。之れに朝宗するを宗教界、思想界の歸一と云ふのである。技に思想の歸一成りて、地上の平和は來るのである。蓋し之れを指して他に永遠の平和人類の幸慶を發見することは出来ないと思ふ。

(五) 閻浮統一の本尊

統一王、統一佛の主義主張全面は日蓮聖人所顯のマンガラ本尊にある。之れを信すれば一切世間の有ゆる政治、法律、國防、軍事、文學、技藝此中に包含して一も漏らす所はない。世界の平和も人類の眞幸慶も此光明裡にあるのである。此本尊は
『聖に三世の人法を貫き
『横に十方の諸尊を統一し
『一切宗教の本尊を網羅し
『一切哲學を攝在し



『日本及び萬國帝王の尊榮要するに宗教、哲學、政治、教育の審美的唯一の大圓鏡であるからである。

(六) 結 勸

今は眞に日本國の大事の時である。東洋大事の時である。世界の大事の時である。人類の大事の時である。先づ大日本國の政治家、教育家、國士國女、國大長者、老弱男女此見地に伍して世界人類の爲め奮勵一番、大日本國の天職使命を果すべきである。南無妙法蓮華經。

日蓮聖人教義綱要 (第十九回)

井村 日 咸

第六章 人身觀 第一節 三界流轉

兵法に自を知り他を知らざれば遂に敗ると云ふことあると云ふことであるが、佛敎の信仰問題に就ても矢張りそうである。如何に佛敎の事や教法の事を研究しても、夫れ自身が如何なるものであるかを研究致さずしては、果して佛敎そのものが自身を益するものであるか、救済を受け得るものであるかと云ふことが明かにならない。夫れが明かならずしては信仰も起り様がないであらう、前來各章に亘つて佛敎の慈悲より起る救済の御手に就てお話を致したが、本章に於ては、吾人は佛敎の救済に浴し得るの資格ありや否やと云ふ自身の上調査を致さうと思ひます。

凡そ佛敎教理に就ては、小大權實の差別あることは教法論の中に申上げた事ではあります。が、實社會の現實の問題に就ては、小乘敎が、其委細を盡して論じて居るので、現實問題に就ては小乘敎を除外しては判明しない、大乘敎は

小乘敎に説明した現實の事象に對して、高遠なる理想を附與し其本體の如何なるかを説明したものである、故に小乘敎の説明した形に、大乘敎の心を入れて始めて完全の意義が顯はるゝのである。其大乘敎が理想を説くに權實の差異があるが、結局は實大乘本門の敎に説明した意味合を附與せられて、始めて完全無缺の人身觀となるのである。此を藏圓相對の妙旨と云ふのである。依つて本節には先づ小乘敎に説明した吾人”をお断致します。

小乘敎には吾人を説いて三界流轉六道輪廻の身であると云ふた、三界と云ふも六道と云ふも同じものであるが、所住の世界から云ふと三界能任の區別に依れば六道と云ふのであるが何れも此世の中に放浪生活をして居るものであると云ふたのである。あちらにまご、こちらにまご、一定の住所も無い宿無嶺であると云ふのである。斯様な放浪生活は何うしてするかと云へば、其根本は妄想即ち眞理に背反する思想があつて、其思想の爲めに間違ふた行爲をする、其行爲が原因となつて、結果を生ずる、其結果は原因に報酬するのであるから善因には善果を

生起したる行爲なれば惡因を主とする、從がつて惡果を生ずる、其惡果は即ち苦痛を受くべき生じて、無限に展轉して遂に流轉放浪の身となつたのが今の吾人であると云ふのである、此を業感縁起の説と云ふ、無量義經に

諸の衆生虛妄に、是は此、是は彼、是は得、是は失と横計して、不善の念を起し、業の惡業を造て、六趣に輪廻し、諸の苦毒を受けて無量億劫に自ら出ること能はず、

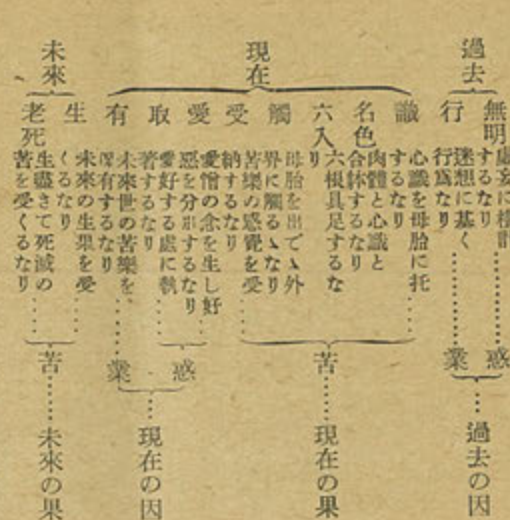
と説いたのは是れである、根本妄想より惡業を造り、苦果の依身を受けて、生死輪廻して遂に出る期なきが吾人凡夫の生活状態である。此關係を圖示すると

である。何れが始めとも終とも無く、無限に互に因と爲り果と爲りて出る期なきの有様である、更に此關係を詳しく説いたのが十二因縁の説明である、此は惡業苦の三道を十二に分けて説明したのである、法華經化城喻品に

無明は行に縁たり、行は色に縁たり、識は名色に縁たり、名色は六入に縁たり、六入は觸に縁たり、觸は受に縁たり、受は愛に縁たり、愛は取に縁たり、取は有に縁たり、有は生に縁たり、生は老死憂悲苦惱に縁たり

(縮法華經一四頁)

と説かれたは、十二因縁生起の次第を示したのであるが、此は過去現在未來の三世に亘りて因果相續して三界六道の流轉の有様である、



過去は無限に又未來も無限に連續して生死海に沈淪して苦惱の生活を續けつゝあるのが、吾人の生涯であると説くが故に、吾等を罪の子、煩惱の凝固體として見て來たのが小乘敎の業感縁起説である、而して吾人が此苦惱より脱がんとするには、迷の根元、無明の妄想を打拂へば現在の苦惱の生活は消滅すると説くのである、法華經化城喻品に

無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す、識滅すれば則ち名色滅す、名色滅すれば

ば則ち六入滅す、六入滅すれば則ち觸滅す、觸滅すれば則ち受滅す、受滅すれば則ち愛滅す、愛滅すれば則ち取滅す、取滅すれば則ち有滅す、有滅すれば則ち生滅す、生滅すれば則ち老死憂悲苦惱滅す (縮法、二〇八)

とあるは縁起したる苦惱の生活を還元して其根源に立還ることを説いたが、小乘敎の教理として、諸法の本體を説明さないが爲めに、其還元の處が無い事に爲つて、遂に小乘の涅槃は空無に歸することが其結論となつたのである、そのうなると無より有を生じて其に苦悶して居るのが衆生の生活と云ふことに爲つて、吾人は煩惱を取拂へは何物も存在しない、全然零なるものであると云ふ、甚だ心細い譯であるが、是は即ち小乘敎の教理の徹底せざるより致す處である、そこで大乘敎には諸法の本體を説明して、其還元の相狀を領解するに、小乘敎に教ゆる處に從はねばならぬが、其本體に關することは大乘敎に依らねばならぬ、此は次節にお断を致します。

第二節 一念三千

小乘敎に於ては吾人の生存の状態を以て、罪惡の結晶體であると説明して、吾等は罪の子なりと言ふたが、其罪の子が己の罪を自覺し、悔改めたるならばどうなるかと云ふ段になると、其説明が充分に出來ない、餘儀なく罪が無くなれば空になると教へたが、それでは徹底した説明

でないから、權大乘には頼耶縁起を説いた、此も充分の説明ではない、それで實大乘に至つて眞如縁起を説いて吾人の本體の何物であるかを説明した、權大乘の頼耶縁起の説には、諸法に眞如の本體あることは説いたが、其眞如と現象の萬有の諸法とは何ふ云ふ關係かと云ふと、纏れざるものではあるが一體ではない、丁度魚と水との如き關係であると云ふたから、諸法の本源を一つに纏めることが出來なくなつたのである、小乘より一步進んだ教義ではあるが、未だ徹底しない、そこで更に進んで實大乘敎に於て眞如縁起論を説いて、諸法の現象と其本體とが一體なるものであつて、丁度水と氷との如きものである、水の性は一つであるけれども氷と爲つて形を以つて別はれて來ると、大小輕重の差別がある、此差別の相が十界の現象界であり其水の性の一體であるのは眞如の妙理である、説くのである、此は現象即實在論の一元論であつて、眞如の一元に一切萬有を取纏めたのである、此眞如縁起の説は、馬鳴菩薩の大乗起信論に於て詳細に御説明がある、其後に起つた大乗諸宗に即ち華嚴、眞言、天台等は、此論の眞如縁起論に基いて、一層完全の説明を試みやうと致したのである、天台大師の一念三千論も、法華經の意義を以つて、此説を完成せられたものと見てよいと思ふ、日蓮聖人の教義は天台大師の一念三千論に更に一步を進めたものであるが、日蓮聖人の教義を御断するには天台の一念三千を心得ね

念三千論を新致します。日蓮聖人は總在一念抄に一念三千の法門を御示に爲つて居ります、其御文を左に、

最初の一念展轉して色報を爲す、是を以て外に全く別に有にあらす、心の全體が身體と成也、譬へば水は全體として大小の水となるが如し、仍て地獄の身と云ふて洞然猛火の中相莊嚴の身となるも、乃至佛界の體と云て色に依て惡を起せば三惡の身を感じ、菩提心を發せば佛菩薩の身を感じる也、是を以て一心の業感の水にどぢられて、十界とは別れたる也、故に十界は源一體にして只是一心也、一物にて有ける間、地獄界に餘の九界を具し乃至佛界に又餘の九界を具す、是の如く十界互に具して、十界即百界と成なり、此百界の一界に各々十如はあるが故に百界は千如と成るなり、此千如を衆生世間にも具し、五陰世間にも具し、國土世間にも具せるが故に、千如は即ち三千となれり、此三千世間の法門は我等の最初の一念に具して全く闕減無し、此一念即色身となるが故に、此身は全く三千具足の體也、是を一念三千の法門と云ふ也。

(遺、二一三)

千即一心也、譬へば不覺の人は水の外に水ある様には思ふ、能く心得る人は氷即水也、故に一念と三千と差別無く一法と心得べし、

(遺、二一五)

一念三千の意味は、此御文に大略出て居りますが、此一念とは、我等が陰妄の一念、即ち我等が暑い寒い食いたい飲みたいと考へる其心である、此心が法性の妙理眞如の全體であつて、此心の外には何物も無い、此心が地獄の身體にも爲り佛の身體にも爲りますので、我一心の水が縁に觸れて大小の水と爲つて三千の諸法と顯はれたのである、此法門は我等が一心を諸法の中心と立て、此一念の中に宇宙全體を括めて見て來たので、我等の一念が宇宙の本主であり、緣起の起點であると論じたのが天台の一念三千論であります、然し此意味は自己計では無い、地獄の一衆生を中心としても、其一念に三千の諸法を具せりと見ることが出来る、佛陀を中心としても三千を具せる體なりと見るが故に、此一念三千論は宇宙の萬有は同一體のもので、少も異目の無いものであると云ふことが結論である、差別ありと見るを迷と云ひ、一體不二なりと見るを悟と云ふのである、生佛一如自他一體一迷不二の平等觀に立脚するを諸法の本源を知れりと名くるのである、此一念三千の五具を論ずるに理具と事具とある、理具の三千とは三千の諸法の現象を一心に戻して、眞如海中には生佛の教名を絶すと立て、眞如の妙理

(同、九三二)

(同、九三三)

此等の御文は一念三千の法門を平易に御示し下されたのであるが、要するに天台大師主張の一念三千論は其修行の方法を觀念に取つて來たが爲めに、理論的に此道理を説明し、自己に此道理を證得せしめんと努めた、故に自己中心の一念三千論と爲つた、此は觀念行に依つて進むものには適當であり必要な事であつたのであつたが、未代愚鈍の輩には、此法門に依つて却つて増上慢を生じ邪見に陥るのみであつたから、日蓮聖人は天臺の法門を一括して、此を去年の曆昨日の馳走であると評せられた、日蓮聖人は天台大師より更に一步を進めて、佛界緣起論を提唱して人身觀の最極の妙處を發揮せられたのであります。

第三節 悉是佛子

以上兩節に申上げた業感緣起の説も、一念三千論も、何れも衆生を本位とし中心として説明を試みたものであるが、一念三千論の中で申上げた如く、宇宙全體が同一不二の體であるとして見ると、中心を何處に取つても差支は無い道理である、華嚴經に心佛及衆生是三無差別とお説に成つたのは此意味である、心とは吾自身のお心である、衆生とは、自分以外は一切衆生である、此二は迷へるものである、佛は悟れるお方である、迷悟自他共に無差別一體のものであると云ふのであるから、此三何を中心と立て、も差支は無い、天台大師は此中に自己の心法を

中心として一念三千を見て來られた故に一念とは自己陰妄の一念である、此一念の中に三千を具すと立てたのだが、此は觀念の修行を取るから、佛陀の一念は高くして我等凡愚の及ぶ處ではない、衆生の一念は廣くして此又我等の思慮の及ぶ處で無い、自己の心は手近では有り一つであるから、此一念を觀じて、此理を證ると定められたが、それでは我等如き觀念の行に堪へざるものには何の益にも立たない、益に立たない計で無く却て迷の種と爲つて増上慢に墮するが故に、今末法の時信心行を以つて修行法と立つるに就ては、其中心を佛陀の果上の一念と定めて、佛陀の果上の一念の中に三千の諸法を攝し、三千の當相は凡て是れ佛陀の果上の一念より顯現したるもので、宇宙全體は如來の活現體であるとするのである、迷を起點として三千の當相を見るのが天台の一念三千論であり、悟の出發點として三千の諸法を見て行くのが日蓮聖人の一念三千論である、之を佛界緣起の妙談と言ふのである、迷中の三千は縱令五具を論ずるとも是は理論である、實現の力は有して居らない、吾人の智慧を以て其道理を證得せんと欲するもので未成品である、果上の三千は其五具の實際を活現して居るのであつて事實の上に其活力を示しつゝある所のものであるから、同じ三千の諸法と言ふても働の上から言へば全然其作用を異にして居る者である、佛界緣起論の上から見たる此宇宙と言ふものは、佛陀を宇宙の本

主とし中心と立て、其佛陀の活動が三千の諸法新羅の萬象として顯はれ來りしものなれば、三千の諸法の起伏隱顯は佛陀の降用以外ならぬものである故に宇宙全體は本佛一人の本體であり其作用であるのである、壽量品に或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を説し、或は他身を説し、或は己事を説し、或は他事を説す、或は己身を説し、或は己身の十界の身を説き身を説し事を説したのであると説かれたのである、天台大師の一月萬影も同じ意義である、顯本法華宗の開祖日什正師は壽量品全品の意義を結束して、應用要に三世に高く利益横に十方に遍しと仰せられたが、如來の活動の縱横無限なるを説きせられたのである、斯様に本佛世尊を宇宙の本主と立て中心と見宇宙の全體が本佛の淨用であると爲ると、此宇宙に生存する吾人も釋尊の活動の中の一の現象である、言を換へて言へば、此宇宙は本佛釋迦佛を家長と爲したる一大家族の集團である、恰かも太陽を中心としたる太陽系統の諸星の集團の如きものである、吾人は釋迦家の一家族として顯れ來り生存し居るものであると言ふことに於て、釋迦佛と吾人は如何なる關係にあるかと言ふことが明瞭に成るのである譬喩品に今此三界は皆是我有なり、其中の衆生は悉是我子なり、而も今此處は諸の患難多し、

唯我一人能く救護を爲す
と説き、壽量品には
我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふものなり
と説き給ふた事も始めて合點が行くであろう、
吾人が釋迦家の一族として釋迦佛の御下に集
り、釋迦佛に統攝せらるることに於いて、三
徳有縁の意義があるのである、茲に吾人は本佛
世尊の愛子なり愛弟なり所従なりと言ふ自覺が
起つて、吾人と本佛世尊とは久遠劫來切ても切
れぬ大因縁を有して居るものである、世尊と吾
人との間には親子、師弟、主従であると云ふ精
神的關係が存在して常に精神的に交通して居る
ものであると云ふことが吾々の精神にキツク
打たれて、始めて佛様の毎日の悲願が吾等
の心底に徹底し得るのである、此意味を委細に
説いたのが壽量品の佛陀の顯本である、壽量品
を再三繰返して拜見すると此意味が分明する、
此を日蓮聖人は壽量文底の一念三千と言はれた
のである、壽量文上は但佛の久遠實成である
と言ふ壽命長遠を説いたのであるが、文底には
佛陀と吾人との精神的關係を明して、感應の一
念三千、意味ある一念三千、法門を明して、吾
人をして佛子として自覺を呼び起さしめ、反省を
促がされたのである此か佛界縁起の一念三千論
である、又事の一念三千とも云ふのである、斯様
に我々の様な愚痴闇鈍の者が、本佛世尊の家族
の一人であると云ふことに成り、如來の淨用の
一顯現であると言ふことに成れば、そこに大に

我身の光榮を拜謝し、自重して以て其光榮に報
いねばならぬのである、斯る光榮を煩ち與へて
其自覺を促さる、處に佛教人身觀の最極微妙の
意義が發揮せられたのである、

日本國體と民本主義

文學博士 三上 參次

日本に古くから民本的政治が行はれて来た
といふ事實は御歴代の天皇の今日残つて居るお
言葉御手翰其等のものによつて窺ひ知る事が能
きる、今上陛下が「義は即ち君臣にして情は親

子」と仰せられたのは即ち御歴代の天皇の御精
神を受繼いだお言葉と拜承する、若しデモクラ
シーを目して主權が人民にありと云ふ風に解釋
する者があれば其はわが國體とは全然相容れざ
るものとして排拒せねばならぬ、斯うした誤つ
た思想に對する確固たる信念があれば如何なる
外來思潮が押寄せて來ても恐るゝ所はない、主
權が人民にあるといふのは不可ないが民を本と
する政治は日本の國體とピッタリ融合合致する
のだ、然るに世人は多く甚だしき誤解を以て是
等の問題を眺めやうとする、民主主義と民本主義
とデモクラシーは何れも別個の意味を有するも
の、やうに云ふ者さへある、之は大變な間違ひ
でまた耻づべき誤解である。

聖 語 一 節

今日蓮祖之を勘るに、法華經の此文を重て涅槃經に演て云く、若し三法に
於て異の想を修するは當に知るべし、是の如き輩は清淨の三歸則 依處な
く、所有の禁戒皆な具足せず、終に聲聞緣覺菩薩の果を證する事能はず等
と云云此絶文正しく法華經の壽量品を顯說せるなり、壽量品をば木に譬
へ爾前迹門をば影に譬ふるの文なり、經文に又之あり、五時八教當分踰節
大小の益は影の如し、本門の法門は木の如しと云ふ又壽量己前の在世の益
は闇中の木影なり、過去に壽量品を聞きし者の事なり云云 (富木抄)

機微譚語 山根青村

七九、老農の知言

水戸烈公一日出て、郊外に遊び、適々
老翁の松樹を手栽するを見る、蓋し翁の
齡已に古稀、而して栽ゆる所は僅かに答
大の稚苗のみ、其爲行甚だ迂濶に類する
ものあり、公因て問ふて曰く、汝餘齡幾
何もなし、而して此松苗を栽ゆる、惟ふ
に何時か其成長を見んと欲するものぞと
老翁公を一瞥して曰く、御身何ぞ此無稽
の言を爲すや、人の生産職業を修むる豈
一日の力を恃まんや、彼の深林大木世の
良材と稱する者、必らず百年の星霜を待
ちて然る後始めて得べし、余の此苗を手
栽するも後世子孫をして恵に依らしめん
と欲するのみ、余老たりと雖も豈人間必
須の業を廢せんや、子は眞に痴漢なりと
業を執て復た顧みず、公大に恥ぢ謝して
曰く、余は是れ當國の大守なり、敢て不

稽の故を以て汝を恥かしむ、汝は是れ余
の師なりと厚く之を賞し、是より益々精
を勵まし治を圖れりと。

然り大木は一朝にして得べからず、百
年の星霜よく雲を凌ぐ良材を得べきなり
世を益し人を濟する事業、何事にまれ豈
短日月にして得べけん、刻苦勵精少くと
も十數年にして漸く物になるなり、世に
「辛抱が金」との諺あり、一朝の景氣に
浮れて身のほどを忘るゝ如き短見者流よ
く何事かを爲さん、元の木阿彌となりて
泣面かくが落なり、然るに現代人は如何
戰勝の空景氣に酔ふて野法圖もなく増長
しつゝ、あらざるか、自己の儲けた金錢を
自己の遺ふは勝手とは云へ、之を有益の
方面に使用せんとはせて、敢て成金風を
吹かして他愛もなく傲奢を競ふは一考あ
りたき者なり、米價の暴騰に百姓衆も鼻
息あらく、鋤鋤持つ手に金口煙草を吹か

八〇、禍福無門

天正年間北條左京大夫氏泰、夏の夜庭
前に狐の鳴聲を聞く數回、近臣眉を顰め
て曰く、夏夜狐鳴く必ず其家に禍害あり
と、君家の爲に切に心痛に堪へずと、氏
泰之を聞き莞爾として笑つて曰く、武士
たる者が獸類の鳴聲杯に心を勞するは何
事ぞ、されど物は祝ひ柄と云ふ事あり、
いて難を未前に防ぐ爲め余一首を詠じく

れんと、夏はきつねになく蟲の皮衣おのれ、の身の上に着よと、之を短冊に認め近臣に與ふ、不思議にして翌朝庭園の築山の蔭に一疋の老狐の骸眞二つに切れて死してけり、是れ氏泰が「さつね」の文字を雨端に切りし故、老狐の身二つとなつて死しけるなり。(藻草)

世談に御弊を拵ぐと云ふ事あり、何ても無き事を氣にしてさも一大事かの如く周章廻る、而も相當教育ある人體にして猶ほ且つともななき愚態を演ず、迷信鼓吹を身すき世すぎとせる者輩、奇貨措くべしとなし其弱點を悪用して物にせんとす、斯くて平仄の合はぬ二七の十六、三五の十八も出て来るなり。地體人間は氣のものなり、禍福登門あらんや、多くは我から求めて苦勞をするなり、兎もあれ氣が弱くては堪つたものかは、正義を守り正道を歩み、光風霽月自己に反省して疾しき所なかりせばとの信念に住し、緊約つた精神もて所謂心丈夫に岩が崩れ来るも驚かぬとの修養だに累積し置かば

千葉縣の宗風を奈何

(大橋日襲師の來信)

善を善とせよ、惡を惡とせよ。今上總片具の大橋日襲師より左記の報道を得た實際七里法華の靈場と稱しながら檀信徒個々信仰の狀態は混濁極まつて居る。頃日千葉縣の信仰氣風漸く復活の模様がある時であるから、各住職は此際共力一致して檀信徒個々の雜亂を矯正せねばならぬと思ふ。曩に本多現下等の盡力に依り寺院の本尊は改正せられたが、寺院が正式でも檀家の方が雜亂では徹底的ではない。由來千葉縣の風儀は偶々殊勝な僧侶があつて改革に熱心しても他からいつの間にか打壊しに掛るといふ風聞もある(今の方には一人)若し假りに斯る僧のある場合は佛敵法敵であるから吾々に於ても大に考へねばならぬ。左の大橋師のは一記者に對しての私信ではあるが、現在の我宗風としては臭い物に蓋をするやうな時節でもあるまいから、有の儘に載せた。(前略)俗に備前法華に安藝門徒と云ふ、上總の七里法華も有名のものに候。然るに本縣は宗府に近接し

千葉縣の宗風を奈何

天下何の恐るゝ事かあらん、祈らずとも神や守らんとは半面の眞理なり、武將氏泰流石は偉哉哉。

聖語、弘決に曰く、常に人を護ると雖も、必ず心の固きに假りて神の守り則ち強しと。災來るも變じて幸とならん、何に況んや十羅刹之を守るをや。(道場神守護事)

八一、自然の大美

東久世通勝伯、庭園を修築して假山泉水甚だ美なり、然るに左方を顧みれば、野草茫茫として坐るに武藏野の昔を想起せしむ、或人その不倫なるを異しみて伯に尋ねければ、伯曰く彼の草叢の中には種々の蟲ありて棲息す、夜間唧々の聲毎に聞て樂む所、故に草蕪を存して修理せしめずと、言未だ終らざるに忽ち琳瑯の聲秋風を送り來る、伯乃ち指して曰く、彼即ち我が良友なりと。(逸話文學)

隨つて本宗高僧の往來監督布教師、特命布教師、常置布教師の追加あるにも拘らず宗風の改善全からず、殊に余の新任地妙覺寺の如き四百戸の檀中を有し、昨年より本年本月に至り一戸つゝ訪問し各戸の佛檀を拜見しみる何とも言ひ難なき状態に候。宗門の氣分は失せ去り日蓮上人の教は忘れ果て居り勝法罪に充たれたるの多數に驚き候。余は廣島に在職中の二十年間、時の管長板垣大前正、隨行本多大僧正(今)の管長)の御巡回の際、各寺の雜亂雜講本尊を改正ありたるなり、而も其の二十年後の今日に至り尙ほ此の状態では備前法華や安藝門徒に對し何の顏色可有之や。本宗は五百の末寺中、本縣は三百四十九個寺を有し、其の内當妙覺寺の如きは四百戸の檀中の佛檀に正式に本尊を安置する家は僅に七月賞に驚くべき次第なり、又佛檀は……

候此外は筆紙に盡されざる義も有之候。實に此状態にては他門に對しても申譯けも無き事と存じ候。是に於て我等は信行上打ち捨て置くべきに非ずと思ひ、去る十一月有惡と協議し、本尊普及會なる者を設立し、目下本尊の製作中に候。又此地の人々は説教及講演中に題目……次第なり、誠に慨嘆に堪へざる候に候、驚くば名師の切々來て改導教護あらん事を希望す。而して本縣人は無宗教無信仰を誇りとする者多きは何故ぞ、物實の然にのみ走らむとする者日に加はり昨年來より小關青年團の内より二十八名の不良青年を發生したりと云ふ事すら有之候、而し此れを動機として有志に計り毎月二回づゝの修養會を當寺に開催する事に相成居候へば近き將來に片貝に光明を放つ事もあらんと存候。此際各位諸君に於ても大に援助あらん事を願居候(後略)

學問でもあるまじく、紅白粉のみが化粧でもなかるべし、受持信行を佛間にのみ求め、修養訓育を會堂の聽講時間とのみ心得居る痴漢は、度し難き品物なり。風流韻事を文學者の專有物の如く心得、心裡荒涼唯利あるのみ、舌端進る所理窟の一點張と來ては閉口頓着なり。仰て日月星辰を見伏して山川草木に接す、事々物々觸向對面皆我が師なり、行住坐臥語默作々以て省察すべく以て感憤すべし。本佛實在の憧憬四恩報謝の妙行日夜朝暮怠るべからざるなり。聖語、彼月郷雲客に勝れたる靈山淨土の行やすきにも未だゆかず、我則是父の柔軟の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に袂を腐し胸をこがす歎ならざらんや、暮行空の雲の色有明方の月の光までも心を催す思ひなり。(持法華問答鈔)



雨後若草

子爵 清岡長言選

- ◎天 千葉縣山武郡東金町 小川 藏司
雨はれし春日の野へにおとめ子の
打むれてつむ千代のわか草
- ◎地 丹後國加佐郡有路上村廣 岡 圓
梓弓春雨晴て心地よく
みとりもふかき野邊のわか草
- ◎人 下谷區中根岸町 小柳 律子
春雨のはるゝ日かけののとききに
もえ初にけり野へのわか草
- ◎佳 作
春雨のはれしあしたにかりたてばきのふにまさ
る野邊の若草 菓 鳴 昭 子
◎昨日までふりにし雨はあともなくこゝろのどか
にもゆるわか草 東金町 萬新舎一止
◎春雨のはれて小草のもえにけりこのりし露の消
しあたり 本 所 勝田 宜和

氣概ある青年僧侶諸君は何よりも先づ自分の寺の檀家の個々に就て本尊の勸請を整へねばならぬ。之が眞つ先きの問題である。(二記者)

誤れる佛教團

馬和尙 矢野 聖頭

越前は佛教國であるとは自らもさう思ふて居れば他からさう評して居るだらう、予は越前に行くと云はれた時にはこれがあるがたい良い研究が出来ると思ふて外國留學でも命ぜられた氣になり飛び立つたが、痛しかつた、當地に來てから三回の大霧に遇ひ頭に白髪は殖へたが幸に剃りこりた頭は見へぬのであるから苦にもならぬ來て見れば曹洞宗の本山永平寺は眞宗の四個の本山即ち眞宗三門徒本山専照寺、眞宗顯照寺本山顯照寺、眞宗出雲寺本山善通寺、眞宗山元本山龍藏寺あり、本派本願寺別院大谷別院高田派別院ありて、寺院の總數が一千六百七十一ヶ寺もある、其内眞宗が八百六十三ヶ寺、曹洞宗が二百十二ヶ寺、日蓮宗が各派合して百四十七ヶ寺、天台宗が百十ヶ寺、淨土宗が百八ヶ寺、臨濟宗が八十四ヶ寺、眞言宗が六十四ヶ寺、黃檗宗が二つある時宗が二十一ヶ寺である比丘比丘尼が深山居るのみならず他國に多數出て居る尾張名古屋は美人と大根が名物であるが越前に比丘尼と坊主が名物であると威張て居る、高木村と云ふ所は戸數が百二十餘戸あるがドンドコ坊主が八十名も出て居ると云ふて村の人は鼻を高くして居るのである、而して夜から晝に移らふと云ふ時晝から晝にならふと云ふ頃には、彼方でボンボンと梵鐘が響きカンカア

ンと牛鐘が打ち鳴らされ、其の間にドンドンと太鼓が響く、それを合圖に町となく村となく家毎にチン／＼カン／＼、ボクボクモクモク、ドソドソと音楽が奏されるかと思へば、其の間から厭世悲觀的な哀音でナムムダー／＼の聲がする、向ふの方では氣の抜けたビールのやうな力のないお題目が聞へるのである、町や村の人の目に觸れ安んずるの多い所には説教とか報恩講とか書いた貧弱な牛紙一枚の張札が風に吹かれて居る、汽車の中や風呂屋でもナムムダーが聞へる道行く人を見れば厭世的な顔をして早く極楽浄土から阿彌陀さんが迎ひに來てくれれば良いと云ふやうな風であるけれども、本多管長殿下に依りて命名された如く阿彌陀不來であるから仕方がない、こんな鹽梅であるから素人目には佛教國であると思へるのも無理はない、其内容を見ると説教と云ふたら相變らず南無阿彌陀佛の六字の名號を唱ふれば極樂往生疑ひなしである、日蓮宗の方は揚婆多品か神力品の講釋か或は在家の御身は只南無妙法蓮華經と唱へ居させ給へとか、日蓮は靈山の良の廊に待ち居候位のごとて檀信徒の禮儀を取りて、報恩料の多からんごとのみ着目して居るのである、其故に個人主義利己主義我儘勝手な言論が盛んになりて危險なる破壊主義類似の言動を爲すものもある、這般の米暴動でも縣知事の官舎や警察署を破壊する如きことを爲して性質の悪い暴行が出来たのである、それかと思ふと官尊民卑の權風は依然として殘存し、舊來の陋習を墨守して進取の氣概乏しく自發的に公共事業に手を出す如きものは一人もなく、公徳心は薄羽にして道路橋梁は破損し橋の上から人が落ちて川に落ちてと云ふ珍談もあれば、僧侶が檀家惣代と結託して寺院内で醬油の密造を爲して僧侶が檀家惣代の宣告を與へられ、坊主が賭博罪で檢査されるなど聞くも思はしきことも深山ある、一面には米價高直番物價暴騰の爲め生活難に追ひ捲られて祈禱坊主となりて迷信を鼓吹し、喫修行と稱しては乞食然と首から箱をぶらさげて哀懇御納受とやつて行くのもある、又他の

入選

- 雨ことに垣内の草もえ出て、心のとかになりにけるかな 静岡縣 佐原 弘風
- 消のこる露はいつしか春きめに消へて下よりもゆる若草 北海道 法谷きよ子
- 露のなくねに小雨けさはれて草はみとりけり 某 鴨 菱
- はるさめはのとかにはれて加茂川の岸の若草もえそめにけり 大阪 池田さだ子
- 春來ぬと野邊の若草もえ出ぬいで子らつまぬ雨はれし今日 千葉縣 佐藤七郎右衛門
- 春きぬと夜の間の雨にうるほいてめぐみあまねき野邊のわか草 某 鴨 白
- 春雨のはれしあしたに聲いさむあら駒なる、野邊の若草 某 鴨 園田 鐵魚
- のとかなる夜のまの雨の今朝はれて露に色そふ野邊の若くさ 某 鴨 園田天津哉
- 雨はれし三笠の山の若くさも色のまさりて見ゆる今朝かな 上 總 岡本榮次郎
- 雨すきし野邊の若草今朝はしも時をそかほにもえ出にけり 大阪 山陽 露竹
- 雨はれていさ、川原に夕日さすいろものどけき野邊の若くさ 麻 布 大塚 曉花
- 若くさの葉末に光る白露はゆふへの雨のなこりなるらん 千葉縣 戸田 浮葉
- 雨晴れて若草青く萌え出てぬ榮ゆる御代の春にあふとて 三河島 西澤 明花
- 春雨の晴るればもゆる若草にいつれの野邊も春めきにけり 金 峰

一面を見れば葬式や法要に際して寺格や僧階の如何を振り廻して喧嘩口論をやるこんな次第で何とも彼とも言はれたことではない、そこで予は指示布教と云ふことを始めて檢校を我信行寺の隅角に懸けた人の目に付く所である、そふして常に左の如きことを擲んで書くのである。

徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を美ふと雖とも、法師と成る義は一もなし法師と云ふ名字を盜める盗人なり、耻づし恐るべし。冥土より最近の通信に據れば歐洲大戦中引き續き世界的流行性感冒の爲めに、旅客輻輳し六道の辻は大混雑を來たし、圓覺大王を始め赤鬼青鬼は大多忙に於て煙草一吹の閑暇なし、地獄の繁昌は娑婆の人の到底想像し難はざる所なり。昔は狐は山や野に居つたが今は町や大道(大道と云ふ所あり鯖江驛のある所にして目下此所に祈禱坊主あり)に居る、家に依りては神棚の上にも居る、狐を養ふ合資や株式の會社も出來た。昔は狐が人に化けたが、今は人が狐に化ける、狐が人に化けるには川端にて藻や草を頭から懸けたのであるが、人が狐に化けるには頭から水を浴びるそふな、熱の深いものと迷信者は魅すに都合が良いと云ふて居る御安心。

右は毎月一日と十五日に書き換へるのである、時に依ると大きな紙に書いて各所に掲示することもある、或者は云く馬和尙は恩給もあれば年金もあるから太平洋を云ふて居られるけれども、我々が馬和尙のやうなことを云へば鼻の下の空殿になるからこれはいかぬと思ひながら檀信徒に頭を下げて居る、正義の主眼をずらすには自己で食ふだけの道を付けてからでなくては到底駄目だと此れは偽らざる告白である、概して越前の坊主はこんな風で檀信徒の機嫌氣味を取ることに腐心して居る、日蓮宗の中にも二三正義の主眼を爲して活動して居るものもあるけれども、濁れる者が多い爲めに彼等に妨げられて思ふやうにやれないのである

馬和尙はこんなことを常に云ふのみならず在郷軍人會や青年會に出懸けて行つて、永平寺でも眞宗の四個の本山でも別院でも遠慮はない四十二番知つてやる、武生の馬場の本林寺と云ふ眞宗の寺で阿彌陀如来の前で折伏強語を大聲疾呼してやりたれば阿彌陀の檀信徒始め住職までも苦い顔をして震へて居た昨年は馬和尙は金澤までも出掛けて行つて處々でメイトルを上げてやりたれば、第九師團長の橋本中將は同期生の好誼上から忠告すると、公衆の前ではあまり猛烈に攻撃するな自分の損じや借借などは多くの人の體を受けねばならぬからとのことであつたから、直ちに御忠告はありがたいが馬和尙は他人の體依しやうとせないとそんなことは眼中にない、短刀直入は日蓮主義の唯一の武器である、説法の者を折伏するのは我が主義の眼目であるといつてやつたのである、此の頃はこんなことから馬和尙に對しては或る部分からは敬遠主義を取つて居るのである、以上の實況を見れば越前は誤れる佛教國であつて、爲めに縣治上にも大なる影響を及ぼし詐欺、横領、偽證、賭博、窃盜犯等あらゆる犯罪者が多くて、産業も發達せず羽二重業者なども目下頭痛餘程の有様であるが、畢竟すれば百事誤れる佛教、道元流や觀賢、蓮如流の跋扈跳梁の應報が現はれて歐洲に於けるジュデヤと日本の越前とは相等しと云ふ結論に到着したのである、此際日蓮主義の鼓吹は最も適當であるけれども一人ではどうすることも出來ぬ。



- 夜半の雨めくみは深く染にけりみどりの岡の春の若草 千葉縣 福島 正之
- 雨晴れしあとに萌たる若くさにのとき春の色は見えけり 京 都 中野 正甫
- 若草のみどりひとしほふかより雨はれわたる武藏野の原 千葉縣 野口 草人
- 若草の春めく野とはなりにけりけき雨のすきし今朝より 龜井戸 堀江 狸溪
- 雨すきし野邊の若草春の日にめくみあまねくみとりしにけり 同 所 堀江得一郎
- 雨晴れて一入萌えし若草にいさみし駒をいさやはなたん 千葉縣 笠見 稜也
- 春雨の晴れしかまゝに出て見れば庭の若くさ萌えそめにけり 名古屋 有田 健山
- 春雨の晴るゝをまちて旅立ては若草萌ゆる奈良志野の原 名古屋 有田 麗陽
- 春雨のはれし行手を眺むれば早や萌え出にけり野邊の若くさ 名古屋 有田 信子
- 雨はれて霞樹曳く春日野にいろうるはしくもゆる若草 千葉縣 中村 決叔
- 雨やみて樹々のしつと誘ふらむ萌出にけり庭の若草 大阪 長尾縮之助
- 春日野のみ空もはれて少女子かうれしくつめる千代の若草 千葉縣 醍醐 榮司
- 雨はれてそゝろあるきの庭の邊に早やえそむる春の若草 下 總 星野 聖祐
- 若草のもゆるころとはなりにけり露さへ消えて

二行 報 道

▲折伏は末法弘法の通規也然し一步誤れば罵倒に終る折伏と惡口雜言とは別也
 ▲言語は謹慎に聲理述義して整々堂々の眞折伏を可心得なり格言の名目耳にて
 ▲内容の虚空は識者嫌厭の招根、表言柔、内實強猛なるは折伏の上乗たるもの
 ▲思想講習會 本月廿五日以向一週東京統一閣に於て開催講師は本多師外博士等
 ▲本山大法會 四月十一日三日至る三日間京都妙満寺にあり花咲き柳緑の好節
 ▲井村僧正の教義綱要完結の上は、能く校正の上出版あれと勸告し來れる人は
 ▲岡山の須山 茂三郎居士なり是れ畢竟該論の好妙精選なるに同感せる一聲なり
 ▲二月天晴會 は統一閣に開けり講師は本多現下にして講題は一乘主義なりき
 ▲七渡修養會 千葉縣東郷村にあり會長中村清吉氏なり二月龍鑑寺に開催せり、
 ▲出席辯士は 小川玉秀、中村會長、伊藤寬隆、岡澤正雄、岡澤利平氏等なりき
 ▲廣部乾山師 報あり一月は眞龜淨泰寺に同志會總會二月は三回の出演を行はる
 ▲千葉縣青年會 僧の運動報あり曰く、味庄船木青年會、六地藏皿木長柄山、上野芝江青年會、山根支會、國府里力丸千代丸支會等也、辯士は例により長岡育應

▲山本賢乘、河野見中、山田誠心師等にて山田四回、長岡三回、河野山本二回
 ▲京都本山の講談二月は萩原部長は護正會明德學園正行院本山婦人會佛敎護國部長を助けて熱心布教に盡力する事如何
 ▲木山の例會 本正婦人會等清水一乘師は成就院其他、三好信道師寂光寺等なり
 ▲吉美妙立寺 信徒豊田伊吉氏今回同寺基本財産へ金五千圓寄附、詳細問合中也
 ▲増田智靜師 同寺壽仙坊にあり九月一日より教布回数五十八、致々感化に盡す
 ▲豊橋の松本 堅晴師立正會を催す松本氏の外に加藤少將特殊部落改善に付講談として津田旭松氏の宗祖傳釋ありたり
 ▲宇都宮安國 妙正寺に聖祖降誕會修行午後下野中學校講堂に於て日宗大學教員
 ▲文學士守屋 貫教師を聘して國民思想講談會を開催し盛況裡に解散す聴衆二百
 ▲青森慈惠院 より毎月一回院報發行大方名士の寄稿并に聲援あらん事を請ふと
 ▲大阪堂開寺 にては十二日講演京藤上田二氏出演二十二日川崎布教師出演さる
 ▲四恩教林の 講演淺草永住町に開く秋山乾英、小川運平、野口日主現下出演す
 ▲身讀會講演 岩井氏宅にて例の如く開催、松尾鼓城主任として出演、益々健實

統一閣日曜講演

二月二日 晴	罪惡に付ての聖訓	日蓮主義の目標	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義
二月九日 雪	三世因果	信行的顯現	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義
二月十六日 晴	宗教の本性と白人闘打破	日蓮主義と思想	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義
二月二十三日 曇	本章の本體と其の形式	三輪の妙化	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義	日蓮上人聖訓要義

山武統一閣教況

▲一月二日 本團講師竹内師は山武郡蓮沼村中根區小川安右衛門氏の招聘に應じ、同氏宅に於て「日蓮上人の國家觀、同人生觀」を講じ大に感動を興へ小川氏は權宗なるにも拘らず、直に本支部に入團したり。翌三日松尾町猿尾、古谷多三郎氏宅に於て「日蓮上人と家庭」を講じ、大に日蓮主義を鼓吹し、兩氏共本團員より年三回講演の開催を乞へり。
 ▲二月一日 舊一月元日本團事務所法光寺に於て團員及權信徒五十餘名相會し、午前八時御寶前に於て佛法を爲し次で村長細谷要之助氏の勸誦拜讀、成島師の講

はるゝ春雨
 ○春雨の降りにし後の若草はおく露さへも緑なりけり
 ○春雨はあとなくはれて若草の人しらぬ間にもえそめにけり
 ○春雨のすまし岡邊の若草は一きわ縁いやましにけり
 ○春雨にのこれる露はむらきえて緑りまはらにもゆる若くさ
 ○春雨はあとなくはれて魂飛こまつか原にもゆる若くさ
 ○春雨のふむにまかさむ雨晴れて色まさりたる野邊の若草
 ○鹿あそぶ若草山の雨はれて今ひとしほの草の色かな
 ○春雨のはれたる今朝は色そひてきのふにまさる野邊の若草
 ○雨晴れし翠の空に色添えて詠めいやす野邊の若くさ
 ○雨すきしあさちか原の若草は色もみとりけり
 ○ふりしきる雨もいつしか晴れたり日毎に崩ゆる春の若草
 ○雨すきし野邊打ちみれば若草のいろもみとりけり
 ○夜邊の雨すきしみ庭のわか草にのときき春の色はみえけり

○追加
 千葉縣 並木うめ子
 春日よし子
 千葉縣 柳橋八重子
 千葉縣 林 承子
 中根岸 小柳成之充
 中根岸 小柳 英夫
 京都 大櫻助次郎
 京都 大櫻 致道
 大阪府 竹内 軌榮
 上 梅澤 鸞
 小石川 松尾 周子
 高岡市 古谷孫右衛門
 千葉縣 渡邊 乾航
 白 山 松尾 清明
 選 者

春雨はいつしかはれてわか草の

目につはかりもえそめにけり
 次號「夜路」(末月迄に必ず切)
 ○天位には選者の短冊を贈呈す短冊受取の上は御一報を乞ふ。

幽靈の眞似する子あり垂柳	青森 宮田黄雲
小鳥籠吊すや街の柳吹く	同
銀逝て庭の柳の淋しさよ	同
春の日に輝く街の柳散	高岡 古谷雲峰
芽柳に半月白き古刹哉	同
柳から柳に綱の渡船哉	白山 富士井筑嶺
舟曳きて柳くゞれり高瀬川	同
川柳や勝居 並ぶ泥の上	同
うらゝかの空や柳下の觀世音	大阪 山中慶山
喰ひ飽きて牛涎くる柳散	青森 惟 泡
尿する水に音あり土手柳	同
根返りの柳に物の流れ寄る	同

課題「柳」

流水の淺淺なる様見ゆ。物といふに與面白けれど、之にふきはしき具體名を附して一層意味をなすやうにも思はる如何にや。

烈なる大光明を認め、渾身の壽命を捧ぐる清高深微なる信の確證に立脚するに非ざるよりは、到底心華開發して一切の思想を宗朝せしむる事は出来ぬ。

朝鮮教報

大聖人によつて力を興へらるべきは正に今日なり、真に導かるべきは今日なり、救はるべきは今日なり。此の危急の時に當りては我人、大聖人に由りて強き清き生活を、開拓せざる可らず。

國民道徳ノ根本義 武田文學士
二月十四日 釜山教育會主催
第一公立小學校にて教職員の爲に講演す

開會之辭 武田文學士
二月十五日 釜山警察署にて職員の爲に講演す
二月十六日 正午より天晴地明會三周年記念講演會を釜山商業會議所にて開演し三發の煙火打上を以て開會の合圖とし以て釜山港頭を震す

二月二十日午後七時より天晴地明會支部主催講演會を木浦公會堂にて開演す
開會之辭 千綿檢事

青森地明會

二月十五日新年總會を青森市海岸中島旅館三層樓上に開く頗る盛況大を極む概況左の如し
一、開會の辭 柏木幹事
二、本尊奉展(野口權大僧正御授與)

長門萩通信

一月十一日 研議會新年初會
新年所感 世良 醫士
民主主義の眞意義と法華の理想 紀野 俊 嬢
會務報告と將來の方針 二階大 尉
講話後宴會に移り數番の餘興に福引等あり新年初頭入會者日羽素介氏長井秀堂氏の所感等あり野北中佐發聲

津山通信

美津津山に於ける能仁一十師の二月中の運動史を報道せんに左の如し
二日、弘通所參詣日、信は力也を能仁一十師
四日、△立正安國に對する所感を、林伊平氏 武田久吉氏 菊田平氏 林ヒサ女 難波壽信氏 清水五六氏
七日、弘通所參詣日、△身證主義を同師、△龍ノ口法難(筑前縣) 妹尾正治君
八日、英田郡林野町常磐旅館にて日蓮主義研究會例會△開會の辭を小林仙次郎君、△人の希望を、同師
九日、英田郡林野町勝英勝會に於て精神修養會にて、△内の生活を 同師
十一日、苦田郡高野村に於て日蓮主義講演會此日聽衆の一人牧又四郎捨邪歸正す、△開會の辭を 山本駒一君、△伴らざる人の欲望を 同師
十二日、弘通所參詣日、△日蓮上人の感激を 同師
十四日、苦田村郷保に於て、△信仰感語を 同師
十五日、津山安藤幸成氏遺曆の祝席上に於て、△祝に對する日蓮上人の教訓を 同師
二十七日、弘通所參詣日、△信心の二方面を 能仁一十師

俳欄より

次號課題 榴榴の花(夏季)
初めて送句の方で一句なりと御紹介したいと思つても、どうも感興の起きない爲に遺憾ながら没にしたものが三四あつた。しかし之に落難なく御送句下さい
『かたくなの人に見せたき柳かな』之は上十二字は理屈に流れ、下五字は謎です。柳枝の逆らはない木質を道義流に吐露したもので、月次の先生であつたなら秀逸に採る句と思ひますが、純文主義に據りたいと思ふ統一俳壇としては残念ながら採

青柳や提灯吊し唄を賣る
うつろ木の柳控へて祠の灯
○評 位置用意ありて柳に重味あり
○柳垂る温泉湯の小井戸哉 菓嶋 鐵
○長土手や柳けぶりて水よどむ 同 同
○水汲みて柳の下に別れたり 同 同
○評 古人の句に會ふたやうな氣がする。遭遇者の笑める様を見よ
○若馬の赤き手綱や古柳 千葉 岡本篤谷
○金殿の柳静かや朝の雨 龜戸 堀江理溪
○青柳や風暖かき渡守 同 同
○晝も夜も枝の休まぬ柳哉 大阪 長尾直水
○葉柳の枝や水にも逆らはず 金 峯
○評 『水は逆らはず』が諷刺又は教訓を含まず居ると見たらば理屈に落ち病を生ず
○丘の柳灯ともすといふ噂哉 福岡 水越生
○妾宅の方位崇りの柳かな 同 同
○がた馬車の乗り場の細き柳哉 同 同
○牛去れば馬つなぎたる柳哉 同 同
○糸柳輪にして置いて門出哉 同 同
○青柳や砂金を拂ふ川の岸 同 同
○卒やめて眠る人らし柳かな小石川 かね女
○馬多く積む驛の柳すゝけり 千葉 金杉秋月
○銀の柄を杖にして芽ぐむ柳かな 麻布 大塚曉花
○銀の柄は不調和にも思へるがそれだけ珍らしく感ぜられた
○魚飛んで波紋岸を打つ柳哉 淺草 青 村
○鴉風呂に提灯ともす柳哉 同 同
○行舟の客面撫でる柳哉 玉山堂 同 同
○草餅や昇れば京の見ゆる堂 同 同
○草餅や香水匂ふ奥座敷 同 同

移り来て隣を見知る草の餅
草餅や代々下月生れるたる
草座や草餅を焼く丸火鉢
草の餅少し小物に頃ちけり
大さに迷ふ昔の兒や草の餅
片言の便來にけり草の餅 東金 直 東
草餅に無沙汰の詫や乳母のち、乳母のち
△評 上十二字は古い想であるが、乳母のちの「ち」(乳と讀んで)に於て種々道想餘情が生ずる。若し「ち」に於てあつたなら凡句に一變するであらう
草餅を運ぶ娘のほてり 畿名古屋 和井 桂
珍らしく草餅つまむ親父かな
小き手に持て刺したる草の餅
居並べる子等顔黒し蓬餅
草餅に嚙の拙き小猿かな
狗抱いて坊は草餅たべるなり
草餅やどれが難やら人じややら
大原女に草餅買はせられにけり
草餅を並へる家のふににけり
▲次號課題 榴榴の花(夏季)
▲俳欄より

りませんでした。
 ▲平素名吟の方に今同に限り共鳴しにくい句を拜見
 しまして、爲に御紹介に洩らしました御方に失禮を謝
 します。
 ▲字あまりの事に就て御尋がりました方へ。私の考
 ふるところでは、俳句は十七字一句は正格で字あま
 りは破格であります。しかし破格に於てのみ始めて好句
 を成す場合に強いて正格たらんとして好句の心を減す
 るとしたら之は無理の仕方であるから、此場合破格調
 こそ當然の道と思ふのであります。つまり破格は常恒
 の格でないから好んで常發すべきものでありませぬ。
 破格は自然的に、又は止を得ざる場合に生ずるものに
 限るのであります。(▲生)

日京法衣門

青雲帽 教服 袴

飯田法衣店

京都市佛具屋五條北
 振替口座大坂八四七

定價表ハ御申遊次第
 何時でも御道中上候

●改正定價並に廣告代價

●一冊十錢、郵送分は別に五厘申受候
 ●前金送金分に限り郵送料申受ず候
 ●代金未済の方へは、六ヶ月目乃至一ヶ年
 目毎に御便利上集金郵便差上ます(但
 此場合郵便局手数料五錢加算仕るべく
 候)
 ●故に郵便送り當方より集金のものは半
 ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受
 候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金
 は壹圓廿錢にて宜しく候
 ●送金は振替貯金口座東京三三五三番
 統一編輯所に御拂込を乞ふ(もよりの
 郵便局にて御拂込み下され度、確實に
 御座候小爲替は紛失のおそれが有ます
 領收證は特に御請求以外は本誌上に表
 として取附め掲載します
 ●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五
 十錢。三分一頁六圓
 ●五號活字十八字詰一行二拾五錢
 交換及び義務廣告はお断り申候

▲御注意

●多数中の事に付若し雜誌不配達の際は御一報を乞
 ふ。早速御送本可仕候
 ●當方より集金郵便差上候節、多数の事に付計算相違、
 又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一
 報下され度願上候
 ●集金郵便差上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も
 有之候。左様の節は其御放任なく草書にて一寸其
 旨御一報下され候へば、引續き御送本申上候。又御
 取附、併せて送本を中止仕るべく候
 ●多数の事に付御返事は往復はがきの以外は御返事仕
 らぬ場合可有之候
 ●諸君の熱心御盡力に依り我統一が宗教雜誌界中に於
 謝し申候

佛像佛具 大販賣所

位牌木鉦 宮殿幢幡天蓋一式

●各大御本山御用達

御來店の節は陳列場へ御來車被下度基迄とは一層
 勉強仕り莊
 敷品一式陳
 列仕置候

三法堂佛具陳列場

長距離電話中貳七八參番
 振替口座東京貳〇七壹
 大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入
 本舖 三法堂 藤田總治

郵税四錢
 定價表ハ御一報
 次第送呈可仕候
 小賣部 京都三條通小橋東入南側



三三

王山畫會

見本御入用の方
 には御一報次第
 進呈致候

東京小石川白山前町一七
 統一編輯所方
 王山畫會

●日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下
 され候儀に候

京都 三條通鳥丸東入ル町
草木本店
 電話中七三五番
 振替口座東京二一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
 電話下谷三四三番
 振替口座東京二四五八番

●生花教授(生花、投入)

毎月土曜日午後正一時より統一閣に於
 て生花を教授して居ます、規則入用の
 方は、小石川白山前一七統一編輯所へ
 御申込みなさい。

日本橋區坂本公園
 加賀 加能亭
 料理

交換廣告及義務廣告御断り

布眼藥

效能、たぐれ目、かすみ
 ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
 ーム等
 定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾
 錢、壹圓、

血の藥

定價壹袋、拾錢、貳拾錢
 效能、男女老の道、産前
 産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣
 絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、
 千葉縣山武郡源村上布田參百番地
 藥王寺

布眼藥 本舖 齋藤日章
 (御注文は總へて下記振替に)
 (振替東京第六七九一番)

●御も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候

佛像佛具 調度所

位牌木鉦 宮殿幢天蓋一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈

總本山身延山
 總本山妙滿寺
 大本山本國寺
 日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前
辻井岩次郎
 振替大阪八一五七番
 電話下三二五八番

●御用仰せ被下候は、可申深切を旨と致候

●念珠ならば小野嘉助店へ

日蓮宗各本山御用達
 顯本法華宗妙滿寺御用達

御念珠 各種

弊店の特色は實用を旨とし従來
 調進仕り候へば多少に不拘御用
 命願上候

京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠 小野嘉助
 電話中二六〇八番
 振替口座大阪一九七二〇番



(號十九百二第)

國民思想涵養講習會	其他
統一俳句發表	子爵 清岡長言選
和歌課題「夜路」發表	主任 松尾鼓城
デモクラシーと佛教と國體	主任 山根青村
機微譚語	八二 鬚髯の美談 八三 本尊の選擇
國體とデモクラシー	海軍大學 校長 佐藤鐵太郎
日蓮聖人教義綱要	僧正 井村日咸
聖德太子の憲法	大僧正 本多日生
釋尊中心の佛教	一 記者

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年四月十五日發行(毎月一週十五日發行)

大僧正 本多日生師撰述

大藏經要義

大僧正 本多日生師撰述

文學博士 井上哲次郎先生叙
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序
文學博士 姉崎正治先生論文

全部 十八卷
每册洋裝上製
三方金線函入
每册四百頁以上
改正定價各册
金貳圓四拾錢
送料各十二錢
既刊 自一卷至十卷

東京博文館
本町

第十卷新刊

本書は大藏經中重要なる經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の真理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を踏観するの必要に迫れるの時に大著に接す。心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべきなり。(大正六年)

既刊目次 昨年七、八月本誌廣告に掲ぐ

- 日蓮主義綱要 本多大僧正著 定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 日蓮聖人正傳 本多大僧正著 定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 高山樗牛と日蓮上人 姉崎文學博士編 正價壹圓五拾錢 送料八錢
- 淫祠と邪神 和田文學士著 正價壹圓 送料八錢

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一册發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄)十錢郵稅五厘▼